

(学力向上)

田島南小学校の国語教育 ―若手育成を意識した授業づくり―

大阪市立田島南小学校 今垣清彦

1. 研究主題設定の理由

本校は、令和4年度に元生野南小学校と元田島小学校が田島中学校に統廃合し、新しい小中一貫校となった。学校行事や集団育成、問題対応など、小学校間の価値観（両校の児童の実態も含め）の違いから生じる議論は、「学校における安全・安心とは何か」ということを、真剣に考える機会となった。

一方、児童の実態として、全教科、ほとんどの学年で大阪市を下回っており、国語科は同一分母集団の伸びが見られなかった。それ以外の教科には、わずかな伸びが見られたものの、児童の学力の課題は顕著であり、取り組むべきことが沢山ある。また、本校には6%の児童が校区にある養護施設から通っており、反応性アタッチメント障がいや、発達性トラウマ障がいに関する知識を身に付けておく必要がある。また、就学援助率が18%と全国平均を約3P上回っているなど、生活や家庭環境に不安を抱えている児童が多い。そんな子どもたちの指導に携わる教員の年齢構成は、教職経験年数が10年未満の人数は、全体の約71%である。

また、新しい学校の立ち上げをめざす人事体制により、若手教員が担任などのやりがいのあるポジションを担う機会に恵まれなかったため、与えられた仕事量に比例したキャパシティとなり、質もスピードも育たないことが懸念された。したがって、急務として、以下に示す若手育成機能を学校がもつ必要があった。

○仕事のやりがいに替わる「忙しく一生懸命になれる場所」をつくること

○慣れあいや利害の一致から芽生える友情ではなく、切磋琢磨できる同僚性を育むこと

○「誰」や「何」に左右されない、教育公務員としての一般的な知識やモラルを示すこと

このように、学校の土台をつくりながら、開校時に示した特色ある教育活動3つの柱の1つである「言語力の育成」をもとに、国語科「話す・聞く」領域から研究をスタートした。

2. 研究の趣旨

児童および教職員の実態を見ながら、国語科の授業研究を進めた。

令和5年度は、若手を育成することが、児童への最善の利益になるとの思いで、若手育成研修に注力し、「忙しく学び合う風土をつくる―育成の土台づくり―」をテーマに研究を進めた。基本的な自主研修や、研究教科以外の研究授業を実施した。板書計画も含めた指導計画を立て、指導案や細案を書いたり、模擬授業で練習をつんだりすることで、授業の難しさにしっかりと向き合うことができ、その経験は、若手教員の授業を観る視点を明確にする一助にもなった。

令和6年度は、上記取り組みを昇華させるべく「小中一貫校として学力向上を考える」をテーマに、5教科の具体的な授業改善を小中協働で進めていくためのビジョンづくりを行った。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 教材開発―「話す・聞く」領域の研究―

- 令和4・5年に取り組んだ「話す・聞く」領域では、消えてなくなり目には見えない「話し言葉」にどのように向き合うとよいのかを考えた。
- 「話し方」をインプットし一般化する前と、アウトプット（実践）する前にも、独自の教材を開発していく必要があることが分かった。
- 令和4年度は、「話す（情報活用）」領域で、令和5年度は、「聞く」「話し合う」「話す（感性）」領域で、全学年のインプット教材とアウトプット教材を開発し、実践した。

視点② 読解支援―「読む」領域の研究―

- 説明文教材の読解において、学年主任による師範授業を行った。
- 指導書に示される指導計画では、概ね冒頭のまだ読みが浅い段階で「序論」「本論」「結論」に分けるよう示されていたが、その方法では教え込みとなってしまう恐れがある。
- その課題解消のため「読みの構え」「内容の読み」「構成の読み」の3段階を提案した。
- 「読みの構え」で、読解意欲につながる教材をつくった。

視点③ 文学教材の読解―若手教員による研究授業―

- 若手教員による文学教材の読解例を示した。
- 原作絵本の挿絵を存分に使い、足りなければ描き足し、動かしたり隠したりする操作に加え、児童が戻るための発問をのせた。
- 若手教員にとって、この指導法は難しかったが、児童たちの自由な発想をきちんと拾い、それでも授業がぶれないように、引っ張りすぎてお話の世界観を崩さないように、何度も何度も練習する姿が見られた

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- 若手育成を組織的に具体的に取り組んだ結果、若手教員が授業の難しさにしっかりと向き合い、「授業を観る視点」を明確にする一助になった。
- 若手教員が授業に対して、達成感の笑顔や、くやしきこみ上げる思いも、結果がどうあれ真剣勝負で挑んできた背中が語るメッセージは、子どもたちに確かに伝わっていた。
- 若手教員が育ち、頑張れる組織体制が本校の強みであり、着実に成果が出ている。
- 粘り強く取り組んできた教科研究と、独自のカリキュラム開発により、子どもたちの「心」と「脳」とが満たされるような授業づくりの土台ができた。

（2）今後の課題

- 学力向上の結果については、今後の結果を待たなければならないが、小中一貫校として、持続可能な学力向上へ向けての授業改善を考え、実践する必要がある。
- 開校して3年を終えようとする現在、ようやく学校の「カタチ」が見え始め、一定の落ち着きが見られた。今後は、「5教科の強化」「読解力の育成」「課外学習」の3つの課題を柱に研究を進め、実践していく。